

# 児童のソーシャル・スキル (1) —性差を中心に—

井上 清子\*・吉田 敦子\*\*

## Social-Skills of Pupils (1) — Focus on Sexual Distinction —

Kiyoko INOUE, Atsuko YOSHIDA

**要旨** 本研究では、ソーシャル・スキルという観点からの児童理解や指導のための一助とするために、児童のソーシャル・スキルの性差を中心とした発達について明らかにすることを目的とした。公立小学校2校の小学2年生から6年生を対象として質問紙調査を行い、706名(男子350名、女子356名)を分析対象とした。その結果、配慮のスキル・関わりのスキルとも、有意に女子の方が高かった。配慮のスキルについては、小学2年生の時点ですでに女子の方が高く、その後も女子の方が高いスキルを持ち続けていることが示唆された。関わりのスキルについては、配慮のスキルほど、はっきりした性差はみられなかった。男子では、配慮のスキル・関わりのスキルとも、学年群があがることによる有意な変化は見られなかった。女子では、学年群があがるに従って、配慮のスキル・関わりのスキルとも下がる傾向があり、特に高学年では、低・中学年に比べて有意に低かった。

キーワード：ソーシャル・スキル 社会スキル 児童 小学生 性差

### I はじめに

ソーシャル・スキルは社会的スキルとも呼ばれているが、1970年代以降、心理学、精神医学、社会学、心身障害学、犯罪学、教育学など、幅広い領域から関心が寄せられ研究されてきた。特に、精神医学や心身障害学の分野においてはソーシャル・スキルのトレーニング方法についても研究がすすんでいる。また、近年では教育現場や教育相談でのソーシャル・スキルに関する研究も増加している。

庄司<sup>1)</sup>は、今まで多岐の領域でなされてきたソーシャル・スキルの定義をそれらに共通する要因で次の4つに整理している。

- ① 学習される
- ② 対人関係の中で展開される

\*いのうえ きよこ 文教大学教育学部心理教育課程

\*\*よしだ あつこ 蓮田市立黒浜小学校

- ③ 他者との相互作用の中で個人の目標達成に有効である

- ④ 社会的に受容される

教育現場においては、学校不適応などの要因のひとつとして、児童・生徒のソーシャル・スキルの稚拙さが指摘されており(佐藤ら<sup>2)</sup>、小林<sup>3)</sup>)、トレーニングも含めた研究がすすめられている。

「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル(小学生尺度)」は、河村<sup>4)</sup>が、公立小学校において、①級友と交友関係を形成し維持する、②集団生活・活動に不適応にならずに参加する、の2点について、児童が実際に活用しているソーシャル・スキルの調査をもとに作成したものである。具体的には、自分から新たな人間関係を形成したり、深めたりするなどの「かかわりのスキル」と、友人の気分を害さないように配慮したり、既存の関係を維持したりする「配慮のスキル」を抽出している。この2つのソーシャル・スキルの観点から児童をとらえることで、教師は、教育的・

発展的援助として場面や状況にあったソーシャル・スキルの指導が可能になり、またそれに基づいて行動の具体的指導ができるようになると考えられている。

その後の河村<sup>5)</sup><sup>6)</sup>の研究では、「配慮のスキル」の得点は、4～6学年のどの学年でも男子より女子が有意に高いこと、「かかわりのスキル」の得点は、6学年のみで女子が有意に高いことが示された。また、児童では、学年が上(下)になるほど得点が高く(低く)なるという規則的な傾向は、認められなかった。一方、中学生を対象とした河村<sup>5)</sup><sup>6)</sup>の研究では、「配慮のスキル」「かかわりのスキル」の得点とも1～3学年のどの学年でも男子より女子が高いこと、学年が上になるほど、両スキルとも高くなる可能性が示唆されている。しかし、以降の研究では、性差や学年差があることは示唆されながらも、具体的な違いは指摘されずに全体として統計処理されるようになった。

本研究では、児童のソーシャル・スキルの性差を中心とした発達について明らかにすることを目的として調査し、考察をする。

## Ⅱ 研究の方法

### 1 調査対象

A県内の公立小学校2校の2～6年生の児童725名(男子361名、女子364名)を対象に質問紙調査を行った。本研究では、記入漏れのあった者を除き、706名(男子350名、女子356名)の回答を分析対象とした(有効回答率97.38%)。その内訳は、2年生133名(男子63名、女子70名)、3年生146名(男子75名、女子71名)、4年生153名(男子74名、女子79名)、5年生127名(男子63名、女子64名)、6年生147名(男子75名、女子72名)である。

### 2 調査時期

2007年11月～12月。

### 3 測定用具

児童の学級におけるソーシャル・スキルの測定には、河村<sup>5)</sup>が作成した「児童が学級生活で必要とされるソーシャル・スキル尺度(小学生スキル尺度)」を用いた。小学生スキル尺度は、15の領域からそれぞれ2つの質問の合計30問に4件法で回答するように構成されていたが、本研究では、被検者の負担を減らすため15の領域からそれぞれ1つの質問にし、合計15問に4件法で回答する質問紙とした。この質問紙は、友人の気分を害さないように配慮したり、既存の関係を維持したりするという「配慮のスキル」と、自分から新たな人間関係を形成したり深めたりするなどの「かかわりのスキル」の2つの因子得点により、児童の学校生活で活用しているソーシャル・スキルの発揮の度合いを測定している。

### 4 調査手続き

研究目的や方法、個人情報などの倫理的配慮などを記した依頼文書および口頭にて、校長と各教員に調査を依頼して了承を得た。

児童への調査は、無記名で行われ、質問紙には、「あなたの友だちとのつきあい方をみるためのアンケートです。テストではありません。自分の素直な気持ちで○をつけてください。」と説明文を入れた。学級担任に、封筒に入れた調査用紙と実施手順を示したプリントを渡し、各自の学級にて児童用質問紙の配布、回収をし、再度封筒に入れて管理してもらい、後日担任から回収した。

なお、統計的処理には、統計解析パッケージSPSS for Windows 11.0Jを使用した。

## Ⅲ 結果

### 1 配慮のスキルとかかわりのスキルの性差

全有効回答について、因子分析を行った結果、河村<sup>5)</sup>と同様の2因子構造が確認されたため、「いつもそう」4点、「だいたいそう」3点、「ほとんどそうでない」2点、「まったくそうでない」1

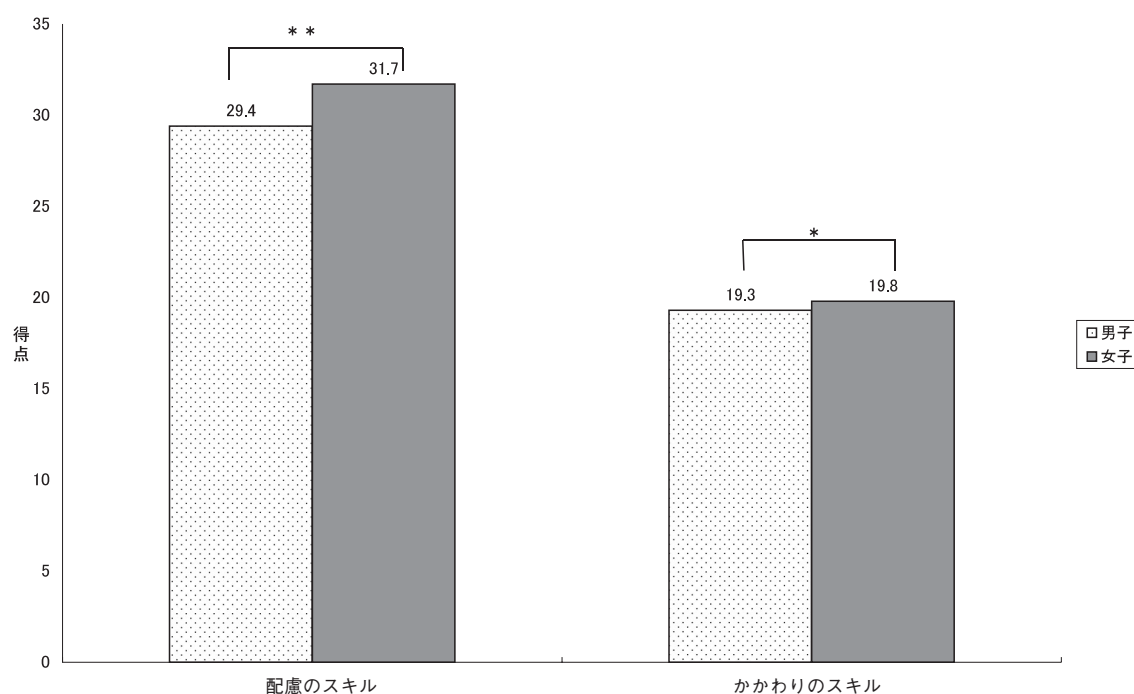


図1 配慮のスキルとかかわりのスキルの得点の平均値の男女差  
 \*\* p<.01 \* p<.05

点として、各質問項目の得点の合計をそれぞれ、かかわりのスキル得点（9問、36点満点）、配慮のスキル得点（6問、24点満点）とした。

配慮のスキルとかかわりのスキルの性差を検討するために、t検定を行った結果、配慮のスキル得点（p<.01）、かかわりのスキル得点（p<.05）とも、有意な性差がみられ、女子の方が高かった。（図1）そのため、以後の分析は、男女別に行った。

## 2 スキルの内容による性差

図2は、各質問（スキル）ごとの男女別の平均値とt検定の結果を表したものである。

男子では、「基本的な話す態度」（かかわりのスキル）が一番得点が高く、次いで「対人マナーの順守」（配慮のスキル）、「対人関係形成行動」（かかわりのスキル）が高かった。女子では、「能動的な援助」が一番高く、次いで「基本的な聞く態度」、「対人マナーの順守」と配慮のスキルが上位を占めた。一方、低かったスキルとしては、順位は違うものの男女とも下位3つのスキルは共通し

ていた。男子では、「許容的態度」（配慮のスキル）、「集団への能動的参加」（かかわりのスキル）、「リーダーシップの発揮」（かかわりのスキル）の順に低く、女子では、「リーダーシップの発揮」、「集団への能動的参加」、「許容的態度」のスキルの順に低かった。

男女で有意差があったスキルは、配慮のスキルのすべて（「基本的なあいさつ」「基本的な聞く態度」「許容的態度」「集団マナーの順守」「さりげないストローク」「会話への配慮」「反省的態度」「能動的な援助」（p<.01）、「対人マナーの順守」（p<.05）と、かかわりのスキルの「集団への能動的参加」（p<.01）、「感情表出」（p<.05）で、いずれも女子の方が高かった。かかわりのスキルの「基本的な話す態度」「対人関係形成行動」「リーダーシップの発揮」「自己主張」については、有意な性差はみられなかった。

## 3 学年群による変化

2年生を「低学年」、3・4年生を「中学年」、5・6年生を「高学年」として、学年群ごとに性

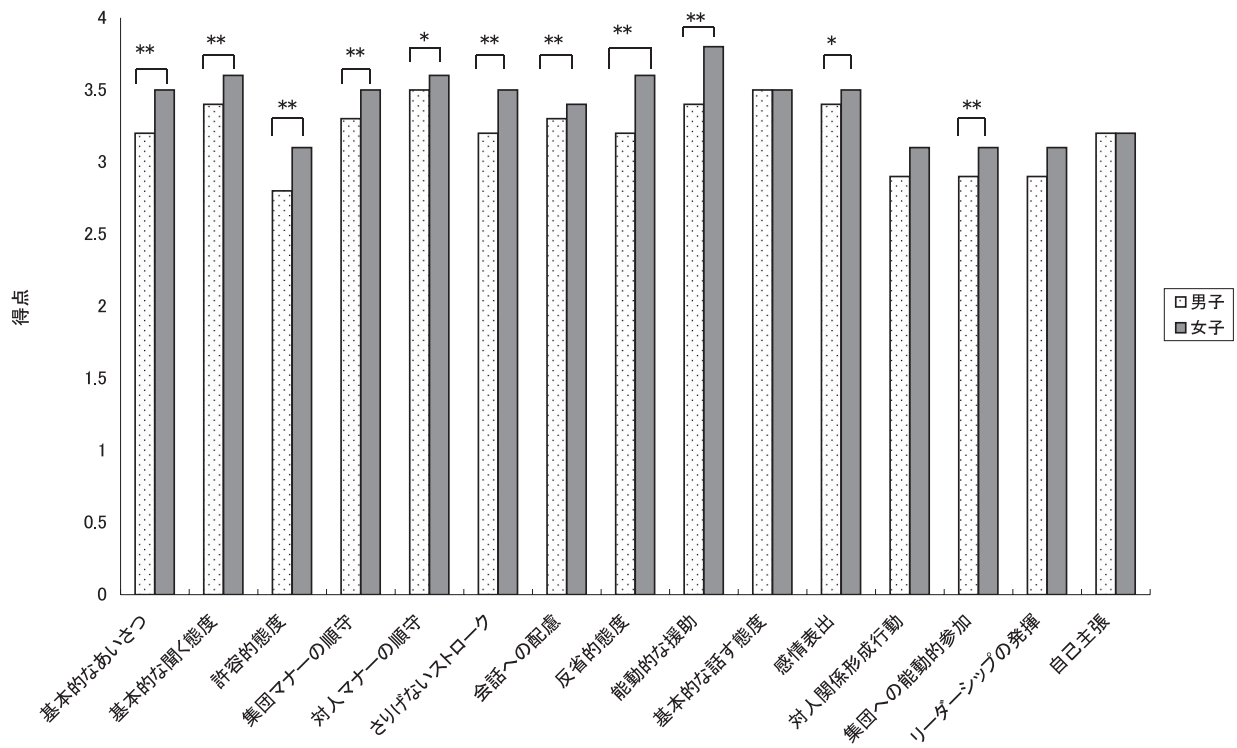


図2 各スキルの得点の平均値と男女差

\*\* p < .01 \* p < .05

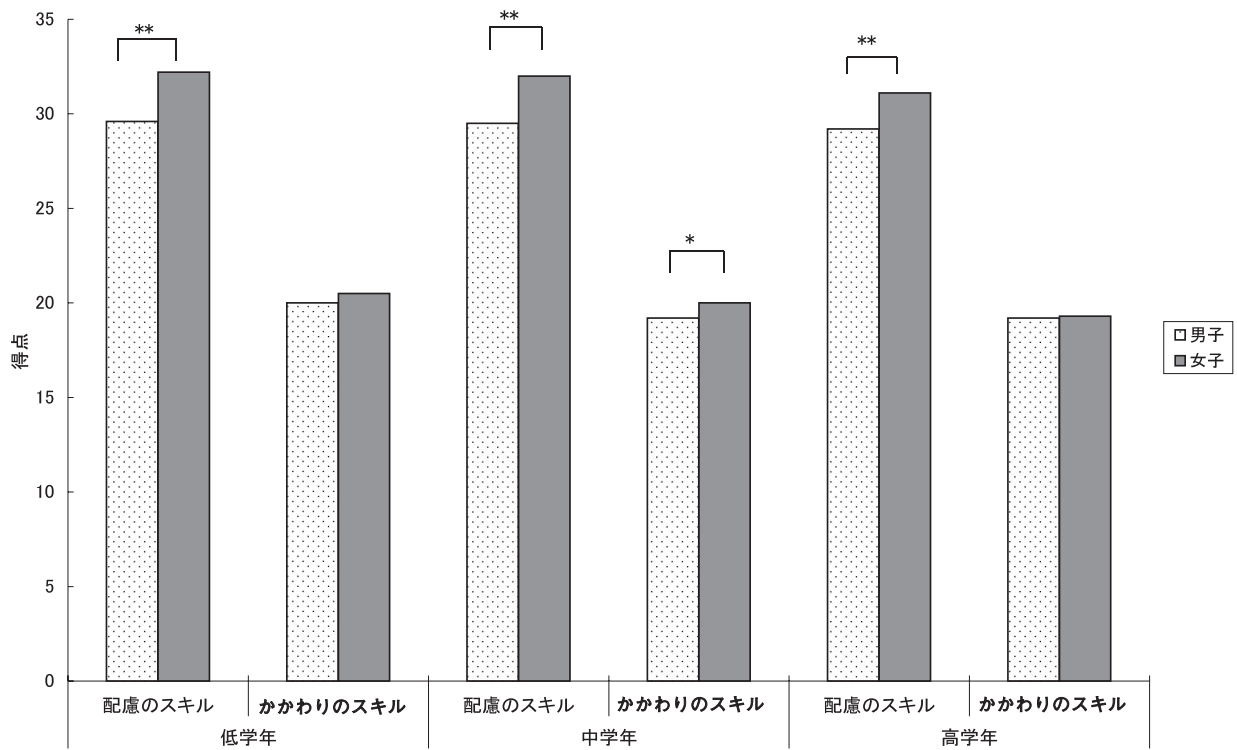


図3 学年群ごとの配慮のスキルとかかわりのスキルの得点の男女差

\*\* p < .01 \* p < .05

児童のソーシャル・スキル (1)

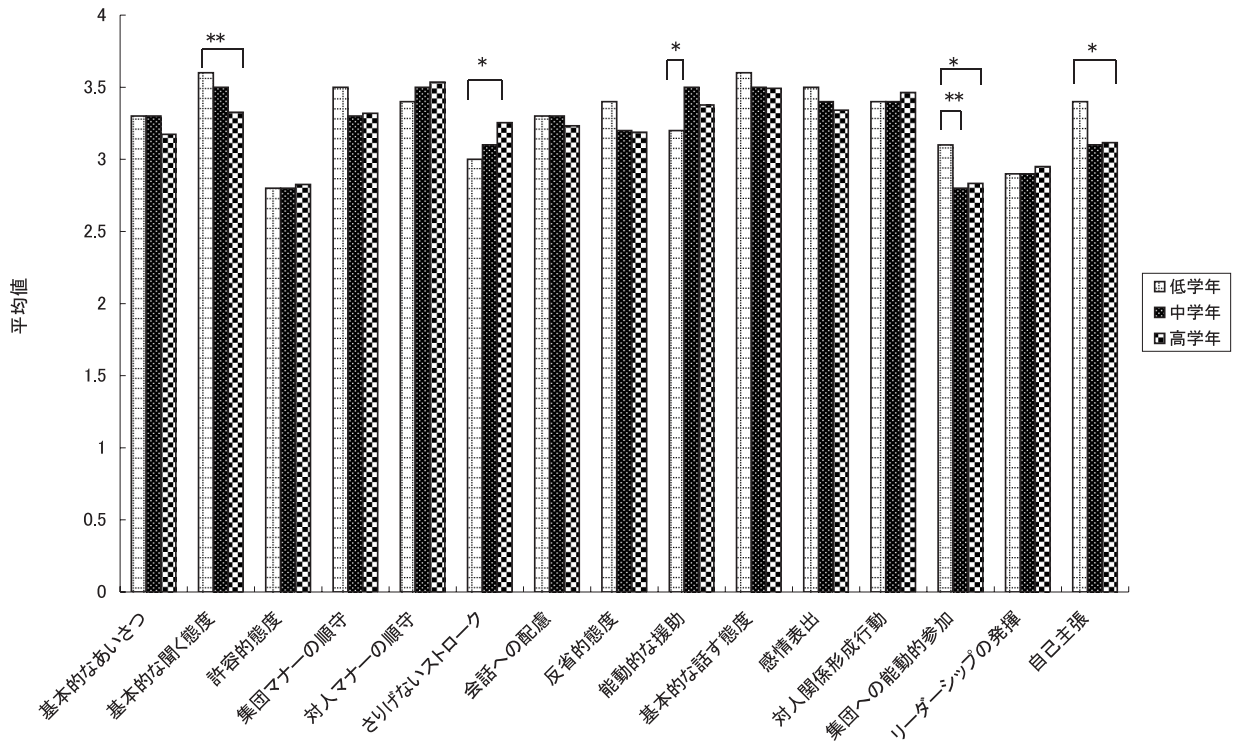


図4 各スキルの得点の学年群による変化 (男子)  
\*\* p < .01 \* p < .05

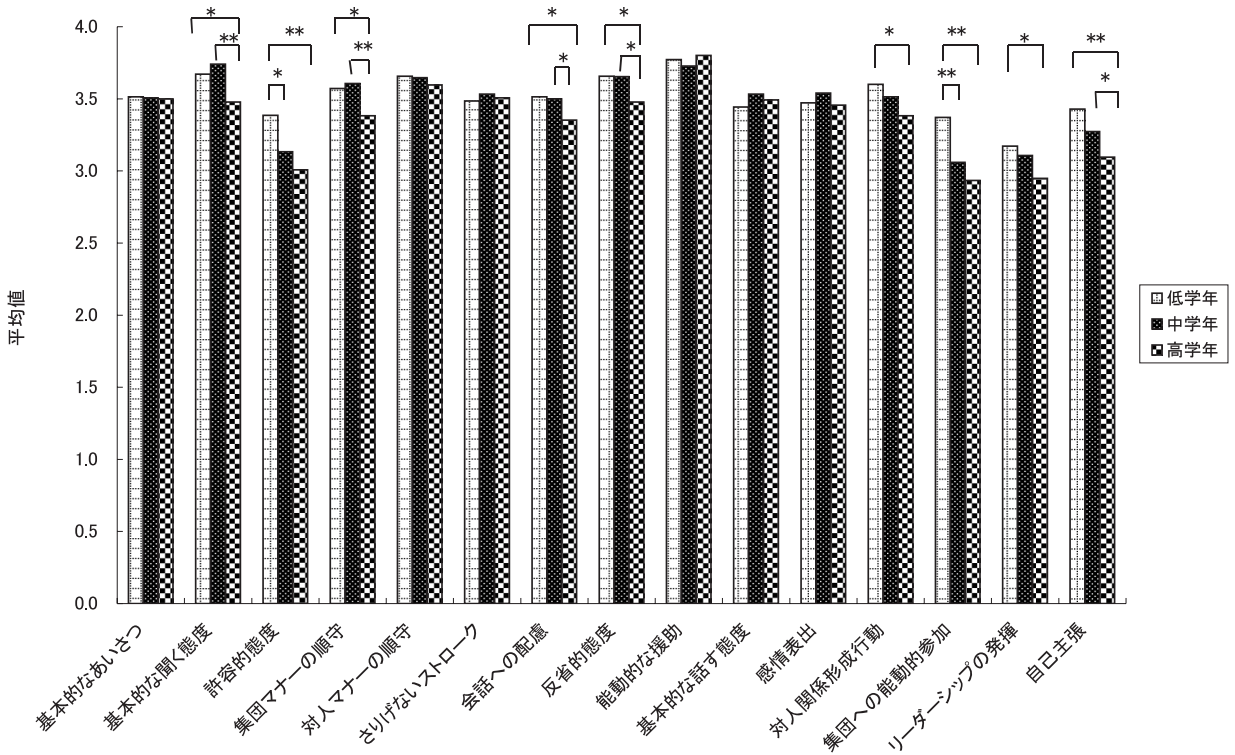


図5 各スキルの得点の学年群による変化 (女子)  
\*\* p < .01 \* p < .05



差を検討するため、t検定を行った結果が図3である。低学年では、配慮のスキルのみが有意に女子が高く ( $p<.01$ )、中学年では、配慮のスキル ( $p<.01$ )・かかわりのスキル ( $p<.05$ )とも、女子の方が高く、高学年では、配慮のスキルのみが有意に女子が高かった ( $p<.01$ )。

各学年群による変化を調べるため、t検定を行ったところ、男子では、配慮のスキル得点・かかわりのスキル得点とも、各学年群間で有意差はみられなかった。女子では、配慮のスキル・かかわりのスキル得点とも、低学年と中学年では有意差はみられなかったが、高学年では、低・中学年に比べて有意に低かった ( $p<.01$ )。

各質問(スキル)の学年群による変化を検討するためにt検定を行った結果が図4, 5である。

男子では、中学年の方が低学年よりも「能動的な援助」( $p<.05$ )は高かったが、「集団への能動的参加」( $p<.01$ )は、低かった。中学年と高学年間では、有意差のあったスキルはなかった。高学年の方が低学年よりも高いスキルは、「さりげないストローク」( $p<.05$ )のみで、「基本的な聞く態度」( $p<.01$ )「集団への能動的参加」「自己主張」( $p<.05$ )は、高学年の方が低かった。

女子では、「許容的態度」( $p<.05$ )「集団への能動的参加」( $p<.01$ )とともに、中学年の方が低学年より低かった。「聞く態度」「集団マナーの順守」( $p<.01$ )、「自己主張」「会話への配慮」「反省的態度」( $p<.05$ )は、高学年の方が中学年より低かった。「許容的態度」「集団への能動的参加」「自己主張」( $p<.01$ )、「聞く態度」「集団マナーの順守」「会話への配慮」「反省的態度」「対人関係形成行動」「リーダーシップの発揮」( $p<.05$ )は、高学年の方が低学年より低かった。

## IV 考察

### 1 配慮のスキルとかかわりのスキルの性差

本研究の特徴のひとつは、対象を2～6年にしたことである。それは、性差があらわれるとした

ら、どの位の学年からみられるのかを、明らかにするためである。児童を対象とした多くのソーシャル・スキルの質問紙調査では、4年生以上を対象としていることが多いが、質問紙のレイアウトを見やすくしたり、質問や選択肢をひらがな中心にすることで、小学校2・3年生にも適用可能であると思われた。しかし、4～6年生を学年ごとに検討した河村<sup>5)</sup>の調査が、学年で一定の傾向が出なかったことから、同一学年内での個人差が大きかったり、発達とは違った集団力動による学年カラーのようなものが出る可能性が考えられたため、本研究では、低学年(2年)、中学年(3・4年)、高学年(5・6年)に分類して分析を行った。

本研究でも先行研究と同様に、配慮のスキル・かかわりのスキルとも、有意に女子の方が高かった。

学年群ごとにみると、配慮のスキルは、低・中・高学年を通して、女子の方が高いが、かかわりのスキルは、中学年のみ女子が高くなるが、低・高学年では、有意差はみられなかった。すなわち、配慮のスキルについては、小学2年生の時点ですでに女子の方が高く、その後も女子の方が高いスキルを持ち続けていることが推察された。女子の方が早くから友人関係が複雑になり、友人の気分を害さないように配慮したり、既存の関係を維持したりする配慮のスキルを学習する環境におかれるのかもしれない。あるいは、学校教育以前の家庭環境などによって、もっと早い時期から性差が現れている可能性もあるので、今後の研究課題としたい。かかわりのスキルについては、配慮のスキルほど、はっきりした性差がないようであった。

### 2 スキルの内容による性差

男女とも配慮のスキルである「対人マナーの順守」が高得点であったが、男子では、「基本的な話す態度」「対人関係形成行動」など、かかわりのスキルの得点が高く、女子では、「能動的な援

助)「基本的な聞く態度」など配慮のスキルの得点が高いことから、得意とするスキルに性差があることが示唆された。

一方、男女とも、「許容的態度」(配慮のスキル)、「集団への能動的参加」(かかわりのスキル)、「リーダーシップの発揮」(かかわりのスキル)などのスキルが共通して低かった。性別に関わらず、現代の児童においては、許容的態度をとれないことや、集団へ能動的に参加できないこと、リーダーシップを発揮できないことなどが、なかなか減らない暴力やいじめ、不登校などの学校における問題行動や不適応行動とも深く関係しているように思われた。友達との関係の中で、自分の感情(怒り)をコントロールするスキル、集団を引っ張っていくスキル、自分の在籍する集団のために何かしようとするスキルを身につけられるようにしていくことが今後の教育現場に必要なことだろう。

具体的な各スキルについても、配慮のスキルは、すべて女子の方が有意に高かった。かかわりのスキルのなかで、有意な性差がなかったのは、男子のなかでは得点の高い「基本的な話す態度」「対人関係形成行動」と、女子の得点の低い「リーダーシップの発揮」「自己主張」で、男子の方が有意に高いスキルはなかった。

### 3 学年群による変化

男子では、学年群があがるほど得点が下がるスキルが多いようにも一見みられるが、学年群があがると得点があがるスキルもあり、全体としては学年群があがることによる有意な変化は見られなかった。

女子では、学年群があがるに従って、配慮のスキル・かかわりのスキル得点とも下がる傾向があり、特に高学年では、低・中学年に比べて両スキルの得点が有意に低かった。

これらの結果の理由のひとつとして、低学年では「いつもしている」(4点)と回答することが多いが、学年があがるにしたがって「だいたいし

ている」(3点)と回答する児童が増えていったスキルが多かったことがあげられる。これは、学年があがるにつれて、自分の行動を内省することができるようになり自己評価が厳密になったため、「いつもしている」と答える児童が減っていったためではないかと考えられた。低学年では自分の行動・思考・感情を分析する力がまだ十分に育っていないことから、自己評価が甘く、「いつもしている」の回答が多かった可能性が考えられる。

しかし、実際に低学年群の方が、わだかまりなく誰とでも積極的に関わったり、配慮をしたりすることができる可能性もある。学年群があがるにつれて、級友に対しても親疎や好き嫌いがはっきりしてきて、いつでも誰にでも、同じように積極的にかかわり配慮するわけではなくなるために、「いつもしている」児童は減るのかもしれない。

さらに、学年群があがるほど、積極的に集団に参加してリーダーシップを発揮したり、自分の感情や意見を出すことで、周囲にどのように思われるかが心配や不安であるために、できなくなってしまいうことも考えられる。男子より配慮のスキルが高い女子の方に、発達に伴って得点が低下する傾向がみられることから、対人不安や不信を基盤とした負の配慮が働くために、高学年になるとソーシャル・スキルの得点が下がる可能性も考えられた。これは、一見児童が友人同士であるように見えても、表面上の関係しか築けていないせいではないかと懸念された。もっと児童同士が、広く深く真の信頼関係を築くことができれば、学年群があがっても、集団に能動的にかかわり、自己の感情を表出したり、意見を言ったりすることができるのではないだろうか。

## V まとめ

公立小学校2校の小学2年生から6年生706名(男子350名、女子356名)を対象として、児童のソーシャル・スキルの性差と学年による変化を調べるために質問紙調査を行った。

配慮のスキル・かかわりのスキルとも、有意に女子の方が高かった。配慮のスキルについては、小学2年生の時点ですでに女子の方が高く、その後も女子の方が高いスキルを持ち続けていることが推察された。かかわりのスキルについては、配慮のスキルほど、はっきりした性差がみられなかった。

男子では、配慮のスキル・かかわりのスキルとも、学年群があがることによる有意な変化は見られなかった。女子では、学年群があがるに従って、配慮のスキル・かかわりのスキル得点とも下がる傾向があり、特に高学年では、低・中学年に比べて両スキルの得点が有意に低かった。

今後は、小学2年生以前の時期についても調査し、ソーシャル・スキルに性差が生じる時期を明らかにし、さらに性差の原因や背景の環境について調査し考察を深めていきたい。

#### 【引用文献】

- 1) 庄司一子「子どもの社会的スキル」菊池章夫・堀毛一也編著『社会的スキルの心理学』川島書店、1994
- 2) 佐藤正二・佐藤容子・相川充・高山巖「極端な引っ込み思案児の社会的適応と社会的スキル」宮崎大学教育学部紀要 68, 1990, p.1-8
- 3) 小林正幸「授業および集団で使用可能なカウンセリング」カウンセリング研究 30, 2000, p.81-84
- 4) 河村茂雄「平成 11,12,13 年度科学研究費補助金 基礎研究 C」研究成果中間報告書, 2000
- 5) 河村茂雄「ソーシャル・スキルに問題がみられる児童・生徒の検討」岩手大学教育学部研究年報 61, 2001, p.77-88
- 6) 河村茂雄「学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討」カウンセリング研究 36, 2003, p.121-128